

山下徳治にみるドイツ教育学の受容問題

—1923~26年のマールブルク大学での遺稿ノートを手がかりに—

宮崎 俊明

Rezeptionsprobleme mit der deutschen Pädagogik bei Tokuji Yamashita
— Seine nachgelassenen Notizen (1923~26) während seines Aufenthalts
an Philipps Universität Marburg —

Toshiaki MIYAZAKI

目次

- | | |
|--|-----------------------------------|
| 1 : はじめに —問題提起と使用資料— | 3) 滞在報告と滞在延長 |
| 2 : 海外渡航の背景 —トラウマとアウトサイダー— | 5 : 学校訪問と学会大会への出席 |
| 3 : マールブルク大学と聴講生山下 | 1) マールブルク北小学校 |
| 1) 語学研修と授業方式 —ことばの壁— | 2) 新教育 —イエンシュの直観像心理学にたつ— |
| 2) 講義：ブルトマン「コリント人への第一の手紙」と「ガラテヤ人への手紙」 | 3) 第8回国際心理学会議と北ドイツでの研究旅行 |
| 3) 講義：ハイデガー：「時間概念の歴史—歴史と自然の現象学のプロレゴメナー—」 | 6 : マールブルクでの日常 |
| 4) 講義：(担当者不祥)「一般教育論」 | 1) 日本人との交流と交信 |
| 5) 日本人グループとナトルプの死 | 2) 小原國芳との訣別 |
| 6) イエンシュとその心理学の「マールブルク学派」 | 3) 身辺の心象 —たった一頁の手記— |
| 4 : マールブルク滞在中の迷いと自己評価 | 4) 山下徳治 —その病理・思考・教育・葛藤・学問と人間の究明図— |
| 1) マールブルク大学の学風の転換点と日独間のパラダイム落差 | 5) 町のトポグラフィーの新旧 —「監獄」の現実とそのメタファー— |
| 2) ミュンヘンへの関心と心理的負荷 | 7 : まとめ |

1 : はじめに — 問題提起と使用資料 —

山下徳治(1892~1965)は、外国の教育学ないし教育の、日本への受容について、ドイツ(語圏)、ソ連、アメリカの主要3カ国、たとえばベスタロッチ、ソ連革命の教育学、デューイの研究・紹介者としてその足跡に対する声望は高いひとりであろう。この歩みは、1920年代以降の日本の教育学パラダイムの動向と変容を裏書きするだけに、その評価もまた変転する要因を内在させている。加えて、講壇教育学と民間教育運動の尺度によっても相違する評価を内包している。とりわけ戦後の

評価では社会主義とモダニズムによって一頭ぬきんでた地位を与えられてきたが、このようなかれの外国の動静への注目は、かれがアカデミックな学校教育の準備過程と講壇教育学に地位をもたずにそれをなしえただけに驚異的でもある。しかし、それは同時にかれの変貌の素早さでもあった。筆者は、先に、千葉命吉との比較でそのドイツ教育学への相反する対応を若干考察したが⁽¹⁾、本稿ではマールブルクに滞在した山下の1923年4月から26年10月までの実態について、かれに残されているノートを手がかりにとらえ直さないし補充をしたい。これは、日本の教育学研究がここほぼ百年間にみせてきた外国教育の受容とそれへの反発の過程、とくにそれが、はたして当の本場の現実や水準に即応する能力をもっていたか、逆に反発や批判が正鵠をえているか、といった筆者の問題意識から発している。外国での滞在研究者数が飛躍的に増加し、研究の国際交流やその水準が問われる今日、その先発的役割をみせたひとり山下徳治の情熱や苦闘とともにその限界にも注目したい。

なお、本稿で使用するかれの遺品ノートは、16冊、約650頁に及ぶ。その内容は、聴講ノート4種(神学、哲学、教育学、心理学)298頁、研究メモ(教育、心理学、哲学など)145頁、言語(ドイツ語、ギリシア語など)65頁、手紙34頁、手記34頁、論文草稿、その他である。日本語ではドイツ語の著書や小説の下訳、論文草稿、生活記録などの断片、合わせて40頁であり、それ以外はすべて外国語、うち大部分はドイツ語である。この遺品ノートについては令息森礼治氏に貸与されるという厚意と幸運に浴した。また、氏によって最近整理された年表と年代順著作目録を頂戴した。記して感謝申し上げる⁽²⁾。

2：海外渡航の背景 —トラウマとアウトサイダー—

山下は、4男6女の三男、第六子として鹿児島市の南方500キロの離島徳之島に生まれた。3歳で鹿児島市に転じて本籍を移し、同時に長兄の戸籍に入る。かれの下には弟ひとりと妹3人がいたが、10歳のとき母親が死亡する。その2年後、12歳での鹿児島県第一中学校の2年生時、授業前の行動により教師の叱責をうけ不本意な退学を余儀なくされた。このため鹿児島師範に再入学、そこは総じて「たのしいものではなかった。」ただ、教育史、課外の思想史に興味をおぼえていたという。また、この学校では教頭追放運動への参加やキリスト教との関わりをもっている。トラウマと反抗の学校期だった。

21歳で師範本科第一部(加設科目：商業)を卒業後、日向に武者小路実篤の新しい村を訪ね、そのさい川で溺れ「ひたすら生きん」の「祈り」体験をしたという。この年、鹿児島市の母校西田尋

(1) 宮崎俊明「1920年代日本の新教育運動にみるナショナリズムとインターナショナリズム—「学習研究」と「教育の世紀」、千葉命吉と山下徳治一、鹿児島大学教育学部研究紀要、50、1999、93~138

(2) 森礼治「山下(森)徳治年表」1998；同「山下(森)徳治年代順著作目録」1999

常小学校に奉職，3年後に長兄と次女の姉のいる台湾の小学校に転じたが，そこからのオーストラリアへの渡航希望は当時の排日気運のために挫かれた。前任校を含め20代前半の6年間は，「一ヵ月十冊三千頁の読書目標」を実行しようとする。この時期，その後の研究と進路の決定につながるカント（I.Kant）の『哲学序説』（プロレゴメーナ）と澤柳政太郎重訳でド・ガン（Rog. de Guimps）の『ペスタロッチ伝』やペスタロッチの『ゲルトルートは如何にその子を教ふるか』を読んだ。『プロレゴメーナ』は第七高等学校造士館の教授天野貞祐からの借用本であり，師範の先輩小原國芳が，広島高師から京大に進学して主宰した鹿児島「探究会」と関連し、『ゲルトルート』は台湾の小学校での同僚松田英治からクリスマス・プレゼントだった⁽³⁾。

1920年，山下は新教育のメッカ成城小学校に小原によばれて上京，3年後，学園の第一回海外派遣生に選ばれた。このとき，かれの前には国内の帝国大学（京都）もあり，マールブルクか京都かで迷うが，ドイツを選択する。ドイツ語は夜間専門学校への通学と，週3回の個人教授で準備した。この留学にかかわる支援では，成城小学校校長の澤柳政太郎，主事の小原國芳，それに長田新など，京大関係者がいた。澤柳は，欧米教育の幅広い紹介者谷本富を誅首して京大総長を辞職したいいわゆる京大事件の中心，小原は同郷にして師範での先輩，玉川学園の創立者，長田はその後の講壇ペスタロッチ研究の先導者である。山下がその留学先をマールブルク大学に決めたのは，新カント派のマールブルク学派の拠点，ナトルプがいたからである。日本での名声の高いナトルプだが，すでに69歳，山下は31歳であった。1923年3月27日，横浜港をでて1ヵ月後マールブルクにはいった。当初の期間は3年，26年3月までであった⁽⁴⁾。

3：マールブルク大学と聴講生山下

1) 語学研修と授業方式 —ことばの壁—

当地での最初の1年間は，外国人留学者がつねにたどる第一関門であり，かつ滞在中の成果を左右する語学研修に専念した。その幅のひろがりは，「ドイツ語，ギリシャ語，サンスクリット，フランス語におよび，朝7時から夜10時まで時計の針の如くに黙々として勉強した」，という⁽⁵⁾。また，かれはフランツ（Franz）という学生から，ドイツ語とギリシャ語の個人教授を受けた。帰国する26年10月（3日）に，今後の継続を希望する旨記しているほどである。もうひとつ，山下が「師にして友」とよび，1901年に訪日経験のあるマーレン（Maren）一家との文字通りの親交は，かれの日常

(3) 山下徳治『明日の学校』1939，45 f；同「ころび行く石 —意志は自己完成への努力である—」松本浩記編『自伝的教師像』1956，342

(4) 森礼治「山下（森）徳治年表」1998；山下徳治『明日の学校』1939，46-79

(5) 山下徳治「ころび行く石 —意志は自己完成への努力である—」，松本浩記編『自伝的教師像』1956，41；ノートでみるかぎり，「サンスクリット」は3頁，「フランス語」はみあたらない。

のドイツ語環境をつくっていた。かれは電話はもちろんタイプも使わなかったらしく、内外すべてのアドレスには電話番号の記載は全くない。また、自分から出した手紙や、ときに受け取った手紙は、時期によるが、控えを取っている。その字体は、きわめて美しく、その文体は範例にそう一方で直訳調であり、感謝と詫びの表現が頻出する。備忘の手帳には書名やアドレスなど、面談中の相手の記入が目につくが、これは日本人にはよくある聞き取りでの難儀もみせていよう。とくに気になる点として聴講ノートにみられる固有名詞のミスがあり、これらから判断すれば山下の一般基礎知識やドイツ語力にあった限界は否みがたい⁽⁶⁾。

試験をへて聴講生 (Hörer) の資格をえた山下は、哲学部と神学部で1924夏学期から26年夏学期までの2年間、夏、冬二学期制の授業に出席した。その聴講ノートのうち完全な形で残されているのは、ブルトマン (Rudolf Bultmann) とハイデガー (Martin Heidegger) の1924年夏学期のもの、およびイエンシュ (Erich Jaensch) の24年冬学期から26年夏学期までの4期分である。途中放棄による断片としては、ハルトマン (Nicolai Hartmann) の1924年5月5日から5月25日までの10回分20頁、ブルトマンの1925年冬学期の11月3日から2月19日までの14頁、ニーバーガールの「新教的国民教育論」1回分 (日付なし) がある。また、担当者不詳の5月6日から7月22日までの11回分のものもある。ナトルプの授業は、聴講生になった24年の夏学期は、その高齢と思わしくない体調のために休講状態だった。また、親交をえていたオットー (Rudolf Otto) の授業には学校参観に優先させるほどに、帰国の年の学期も出ているが、そのノートは残されていない。

夏学期は通常5月初旬から7月下旬まで、冬学期は10月下旬から2月までが開講期間にあたる。現在のプロテスタント系神学の部門 (Fachbereich) にあたる大学教会も19世紀末に建てられていたが、授業は現在のめぬき通り「大学通り」に一次大戦中にできた「ヘッセン侯校舎」でおこなわれた。講義は、1回1時間、回数は週1回ではなかった。ブルトマンやハイデガーなど週3回ないし4回行い、当初の計画をおえるためには、不規則な日程もみせた⁽⁷⁾。山下のノートには、ブルトマンの場合、たとえば、バイブルの、ドイツ語、ギリシャ語、日本語が併記され、ギリシャ語の文章、

(6) たとえば、RとL、SとG、TとTZ、CKとCHの混同が多い。また、Fro[ö]ber [1], G[S]igmund Freud, Hun[m]mbor [ld] tなどで誤記がくりかえされている。なお、上梓されなかったが、ナトルプの『社会的理想主義』の翻訳はその原稿を三木清に閲読を頼もうとし、ノートにはペスタロッチの『基礎陶冶の理念』(レンツブルク講演)の序の部分の数頁を訳出しているが分かりにくい。

(7) 山下のノートには、最初に、その時間の予定項目が左端に板書されるといった、たとえば筆者が聴講したハーバマスやクラフキがするような現在の通例は、ハイデガーに1件ある以外になく、さらに、2時間方式で約10分間の中間休憩といった今日の方式もなかった。同様に、ハーバマスやイリイチなどにみられる2~300人の、あたかも講演会のごとき規模やスタイルとも無縁だった。20年来の友人、マールブルク大学の教育史教授H.Stübigに調査をわずらわしたが、それによれば校舎や不規則な補習授業からしても小規模の授業であり、1925年のマールブルクにおける学生数は2,136名、住民は23,530人だった。すでに1905年に医学部で学位をとった日本人女性がいたという。Hermelink, H. u. a.: Die Philipps-Universität Marburg 1527 bis 1927, 1927, S.499 ff.; Meger, G.: Bedeutende Wissenschaftler der Philipps-Universität in Marburg, eine illustrierte Stadtgeschichte, 1985, S. 159 ff.

整った配置,さらに配布資料の可能性などもうかがえ, 1回で1頁, 20~30行, 高度に専門的で, 資料で実証する特殊研究の内容である。また, ハイデガーの場合, 山下のノートの筆記量は, ブルトマンに比し1回分が2~3倍にあたるが, たとえば, 『存在と時間』の叙述がそうであるように, その解釈学的スタイルからして, まさに滔々と講じていたと考えられる。後年刊行されたその講義録の分量からみれば, ノートと刊行本での全442頁とには圧倒的な差がみられる⁽⁸⁾。

2) 講義：ブルトマン「コリント人への第一の手紙」と「ガラテヤ人への手紙」

山下は, 1924年の夏学期と25年冬学期に上記のテーマをあつかったブルトマンの講義にでた。このふたつは一般講義というより, いわゆる研究(Übung)に類した高度に特殊的な内容である。新約聖書のギリシア語原典とそのルター訳の両テキストを徹底的に吟味し, 先行研究がみせる解釈の検討と批判がすすめられた。そこでの白眉は, ブルトマンがその歴史神学を特徴づける様式史的手法にあり, 新約で2部構成のパウロのコリント書簡が, 原型は4部構成でありながら, その第1部と第4部が失われたことを検証した点にある。また, パウロの信仰の生起, つまりその信仰の実存史は終末論(Eschatologie)に動機づけられること, それによって信仰者に生起するその現存在が, キリスト・イエスが示した過去と, 信仰者の実存史の将来にたいする歴史意識の時との中間期にあること, この二点をブルトマンが提起したのは, 時代思潮の主流へにかれの関与を意味した。

授業に参席した山下は, ブルトマンが新約神学の巨星になる前の時期にその方法と思想内容に直接触れていた。神学研究者でもなく, 一キリスト者であるかれがこの講義に参加したのは, 鹿児島師範学校期にキリスト教に接近し, 成城小学校期に内村鑑三による無教会派の日曜学校に加わっていた事実の延長線上にもあろう。しかし, ブルトマンの精細かつ高度な歴史的, 教義的解釈の方法と実存論的信仰論の可能性をかれが受容するには, 限界があった。事実, 後述のハイデガーとともにブルトマンも山下がのちにその教育分析や教育思想に用いた形跡はない。そのかぎりではかれは, ドイツの新しい学問動向である現象学や解釈学についてマールブルクでの受容のチャンス逃したといえなくもない。戦前戦後のヨーロッパ思想の展開からすれば, 山下には早すぎた接触であった。かれが日本から持ち込んだ旧来の認識論や価値論の哲学への関心は, たとえばニコライ・ハルトマンの授業は途中で放棄し, 「聴く気にもなれない」と澤柳に書いている場合とは逆に⁽⁹⁾, このふたりに揺さぶられ, かつかれ個人の実存の次元を直視させられた。

このことは, 山下が大学教会のミサに出席し, 担当牧師の説教内容についてかなりパセティックで規範的な, 自らの感想をノートに数回書きとどめている事実と無関係ではない。また, その留学目

(8) Heidegger, M.: Gesamtausgabe II. Abteilung: Vorlesungen 1923~1944, Bd. 20: Prolegomena zur Geschichte des Zeitbegriffs: Marburger Vorlesung Sommersemester 1925, hg.v. Petra Jaeger, 1979

(9) 山下徳治: 「澤柳先生へ」教育問題研究(成城小学校), 1924年10月, 114

的であったペスタロッチ研究でもペスタロッチを己れの情熱と重ね合わせるが、これも、ナトルプのみでなくお続く日本のペスタロッチ受容の現実であった。

3) 講義：ハイデガー「時間概念の歴史 — 歴史と自然との現象学のプロレゴメナー —」

山下は、ハイデルベルクの新カント派の雄リッケルトのもとを去り、ハイデガーを追ってマルブルクにきた5歳年下の三木清とともに24年夏学期の講義に出席した。そこには解釈学的手法を自身の研究方法にも導入するために、5歳年上のブルトマンが加わっていたのを三木清も目撃している⁽¹⁰⁾。このとき、ハイデガーは、3年後に上梓される『存在と時間』(1927)を練り上げつつあり、その内容を講義で披瀝していた。また、その傍らで、この27年に迎えるマルブルク大学創立400年記念の刊行物に哲学部を紹介する筆をとろうとしていた。したがって、コーヘン、ナトルプ、オットーなどの後には、ハイデガーやブルトマンのような新星がひかえ、山下はその前にいたことになる。それだけに、このハイデガーの講義が終了する直前の7月24日のナトルプの死は、マルブルク学派の新カント主義の終焉を意味した。

ハイデガーの講義は、山下が聴講ノートに記す上掲のテーマで5月5日に開講された。週3回、毎回1時間のペース進められ、途中で休講もあって、7月31日の最終講義を前にした2週は各4回となって当初の計画を完了させている。1頁20行分の山下のノートは表裏35枚、計70頁分にわたり、先のブルトマンに比しその分量は2倍である。その初回にはこの学期の進行計画として以下の3点、「1)時間規定の分析、2)時間規定の歴史、(1)ベルクソンの時間、(2)カントとユダヤ人⁽¹¹⁾にみる時間、(3)アリストテレスの時間概念 3)現象学的研究からみた存在問題の解明」が提示された。このうち、2)の初回の場合には、デカルト、ロツツェ、コーヘン、ディルタイ、ヘルムホルツ、ブレンターノ、ジェームスなど、20以上の人名や学派が登場し、山下は、ハイデガーを聞き取ったかぎり、それぞれ2～5行のコメントをもっぱら単語やフレーズで記入している⁽¹²⁾。ただ、かれがその聴講ノートでみせる人名などの誤記は、理解や受講の条件が必ずしも十分でなかった実態もうかがわ

(10) 三木清：「消息一通 —1924年1月1日 マルブルヒー」思想，295，1924年3月号，748

(11) この「ユダヤ人の」(Judens)は、「ニュートン」の聞き違いである。Heidegger, M.: Gesamtausgabe II. Abteilung: Vorlesungen 1923~1944, Bd. 20: Prolegomena zur Geschichte des Zeitbegriffs: Marburger Vorlesung Sommersemester 1925, hg. v. Petra Jaeger, 1979, S. 11

(12) これらは、講義にあたってハイデガーがあらかじめ示し、継続講義の性格上それ以前の内容の案内のために示した参考文献である。したがって全集では、全36節のうち、第14節が講義内容に該当する。W.ジェームスについては山下はノートに、「当時ドイツで学んだ(ブレンターノの時代)」と書くが、ハイデガーのテキストでは「ドイツと全ヨーロッパで影響を受け、それが逆にベルクソンに影響した」とある。Heidegger, M.: Prolegomena zur Geschichte des Zeitbegriffs, dito, Bd. 33, SS. 9, 28

せる。

3回目以降の講義が、現象学の方法論上の基礎概念をあつかい、とくに10回目以降では「存在的」と「存在論的」のカテゴリーや、身体と精神の現象学的人間学などへと進むにつれて、ノートの記事分量も次第に増加した。とくに上記の計画の3)ではハイデガーは独自の「世界内存在」の概念を設定し、そこでの「現存在」の分析を展開する。気がかり (Sorge), おしゃべり (Reden), 不安 (Angst), 死 (Tod), そこでの現存在の「地盤喪失」 (Bodenlosigkeit) ないし「あやまれる落ち込み」 (Verfall) などが分析され、さらにその傍らで実存の時間性と展望の先駆・予期性ともいうべき「先」 (vor) の存在構造が不安と死をめぐって方法論的に展開された。ここにみられるのは、いうまでもなく、解釈学的、現象学的哲学として1927年に刊行され、20世紀哲学の金字塔となる『存在と時間』の主要概念のいわば累積であった。

山下が筆記したノートには、ハイデガーが板書し講じる内容の変化に応じる改行などはほとんどない。かれがその文章をおおむね単文で記しているところにはその緊張や熱意を示して余りあるものがある。この学期の前半ではフッサールの現象学の志向性概念、ハイデガー特有の存在的と存在論的の概念の区別、シェーラーの心身の人間学、これらが講義された。しかし、後半は変化をみせる。たとえば、7月下旬に至って20日、23日、24日、27日、28日、30日とつづき、31日で最終講義となるまでの7回分では、「おしゃべり」と「あやまれる落ち込み」、「不安」、「死」といったテーマが2回ずつとりあげられた。このうちノートでほぼ半分を占める20頁分の「おしゃべり」と「あやまれる落ち込み」は、『存在と時間』第1篇5章の終末部の35節から38節にあたり、「先駆性」の実存論的構造については第2篇第1章終末部53節の言説に対応する⁽¹³⁾。ノートのこの部分は講義の前半にあった概念的説明的内容や、先行の「現象学的」研究の批判とは様相を異にして、ハイデガーが解釈学の本領を発揮する箇所である。山下のノートでみるかぎりでは、ハイデガーもこの学期を当初は先行研究の紹介や批判的コメントに費やし、7月下旬に至るや主題の凝縮度を高め、『存在と時間』の第27章の各最終節に位置づけた主題を論じていく。こうみるならば、ノートは、記録でなく、むしろ山下という記述者の解釈形態であり、なによりその主題の受容であった。

しかし、山下が傾注したハイデガーの講義筆記を、他の男女ふたりの聴講者 (S. Moser, H. Weiß) のノートにもとづいて、編者 (P. Jaeger) が収録した全集第20巻の第2部予備篇9節分と本編2章構成の23節分からなる全442頁と比べれば、その分量は極端に少ない。このことは、裏返していえば、

(13) Heidegger, M.: Sein und Zeit, 1927, S.159~180, besonders S.159~175 : Ders.: dito, S.260 ff

山下がハイデガーを直接聞き、理解し、筆記することの困難さの一面を物語る⁽¹⁴⁾。なにより、従来から認識論的だった山下にはハイデガーの存在論的解釈学の壁は高すぎたし、その現存在の分析論を自分の教育学に適用している証拠はない。この点もまたかれがブルトマンにみたものと似ていた。

ハイデガーがフッサールの後継としてフライブルクに転じると、三木清が、マールブルクをすててあとを追わんとしたのとはちがって、山下は、ハイデガーの思想や方法を論じることはなかったが、マールブルクにとどまり、本場の変化やその印象を日本につたえた。そのプロフィールは、身の丈170センチの山下自身より「小柄で」「素朴な精力家、ミッシリした感じを与へて呉れる人」、「しかし運動家で大学の講義にも運動服を着て来ます」(ママ)、と書き送った。この描写は、ハイデガーがバイエルン人の体躯の特徴を示し、むしろそのフォーマルなグリーンの民俗制服を着用するのを洋行者山下がとらえたズレでもあった⁽¹⁵⁾。日本の留学者の、いうならば「ハイデガー詣で」は、戦後ドイツでの批判とは無関係にその死後まで続くが、山下も三木などにつれだつて、親日家ハイデガーの知己をえた。事実、その自宅に招待されたりし、離独を前にかれに挨拶状をしたためている(1927年10月2日)。それにかれのもとに学位候補者としており、今日ではユダヤ的思想家として名声のあるヨナス(H. Jonas)の仲介でそのポートレートも所持していた。

(14) このことは、たとえばハイデガーの最終回講義の最後の箇所は、山下のノートの最終頁に対応し、次のような文章になっていることからいえる。

Vorwegsein ist Zeit—Zeit ist nicht draussen—Zeit ist das, was Sorge möglich macht ... Alltagslichkeit verfallen [2~3語不明] Zeitlichkeit. Bewegungen der Natur laufen nicht in der Zeit, sie begegnen in der Zeit—echte Natur entdeckt Zeit ist wir selbst. あえて訳出すれば、以下のごとくであり、その意味するところはあいまいである。「まえもってあることこそが時間である。時間は外部にはない。時があるから気がかりなのだ。日常生活は〔2~3語不明〕の時間性なかにあやまって落ち込む。自然運動は時間のなかで流れない。時間のなかで出会い、真の時間を発見するのかわれわれ自身なのだ。」

~~Vorwegsein ist Zeit—Zeit ist nicht draussen—Zeit ist das, was Sorge möglich macht. —alltagslichkeit verfallen mit und in der Welt. Zeitlichkeit. Bewegungen der Natur laufen nicht in der Zeit, sie begegnen in der Zeit—echte Natur entdeckt Zeit ist wir selbst.~~

Die Zeit, die wir alltäglich kennen und der wir Rechnung tragen, ist genauer besehen nichts anderes als das Man, dem das Dasein in seiner Alltagslichkeit verfallen ist. Das Sein im Miteinandersein in der Welt, und das heißt auch im Miteinander-entdecken der einen Welt, in der wir sind, ist das Sein im Man und eine bestimmte Art der Zeitlichkeit.

Die Bewegungen der Natur, die wir räumlich-zeitlich bestimmen, diese Bewegungen laufen nicht ›in der Zeit‹ ab wie ›in‹ einem Scharnier, sie sind als solche vollständig zeitfrei; sie begegnen nur ›in‹ die Zeit, sofern ihr Sein als reine Natur entdeckt ist. Sie begegnen ›in‹ die Zeit, die wir selbst sind.

Das Sein, in dem Dasein seine Gänze eigentlich sein kann als Sich-vorweg-sein, ist die Zeit.

Nicht: Zeit ist, sondern: Dasein zeitigt qua Zeit sein Sein. Zeit ist nichts, was draußen irgendwo vorkommt als Rahmen für Weltbegebnisse; Zeit ist ebensowenig etwas, was drinnen im Bewußtsein irgendwo abschnurrt, sondern sie ist das, was das Sich-vorweg-sein-im-schon-sein-bei, d. h. was das Sein der Sorge möglich macht.

Heidegger, M.: Prolegomena zur Geschichte des Zeitbegriffs, dito, Bd. 20, S. 442

(15) 山下徳治:「澤柳先生へ」教育問題研究(成城小学校), 1924年10月, 114頁; 山下のパスポートによれば, その身長は170センチだった。

4) 講義：(担当者不詳)「一般教育論」

山下のノートには、担当者も年次も無記入で詳らかでないが、5月6日から7月22日までの週1回11回分、16枚32頁分の「一般教育学」とタイトルのつけられた記録がある。そこでは教育や陶冶の概念の説明にはじまり、ミュンスターベルク、ナトルプをへて、テーニエスを中心にした社会学的な理論が紹介され、それを教育学の母科学とする新しい傾向をみせる。とくにこの講義者は、テーニエスのゲマインシャフト(共同体)概念をもって家庭、学校、民族の教育共同体を強調し、そこへミュンスターベルクの価値のヒエラルキーや、衝動、行動、意志などのいわば人間学をしばしば図式化して説明する。これを山下は克明に筆写し、そこで推薦されたマックス・ウェーバー、ジンメル、デュルケイム、メッツガー、スパン、フィーアカントらの、1903年から23年までの文献を記録している。また、この講義ノートにはパウル・バルトの名も目立ち、かれが導入した進化論的、有機的、相对主義的な視点が記されている。この傾向は欧米の先導的方向をとらえるために渡欧した山下のような留学者にはハーバード・スペンサーやデューイといったアングロサクソン系を連想させ、これも一次大戦後のドイツがみせるひとつの傾向として留意させたにちがいない。かれやドイツでなお優勢な哲学的傾向のまえには、それが社会学的な新しい動向と映ったであろう。

ドイツの講壇では、哲学における現象学と、教育学における精神科学的教育学とが有力な存在としてかれの前にあった。後者の場合、シュプラランガーを中心にディルタイ派がすでに一大勢力を形成しつつあったが、これにたいする山下の関心は高かったとはいいがたい。同じマルブルク学派でも、コーヘンやカッシーラのごとき論理主義でなく、むしろ実践的、価値定立的なナトルプのもとにあった山下には、一般に精神史への関心も高くなく、その素養が不足していた。それは、事実ライプニッツ、フンボルト、ディルタイなどの人名の綴りが繰り返し誤記されるところにもみえてくる。

このような山下は、そのノートの行間に、「人生のイデーのために」「指導者の課題を!」「人生は活動だ」、と書き記す。体験、労作、ことばの共同体が目指されねばならない。問題は実践であり、理論はあくまで実践のしもべである、というのである。留学前の成城での活動やそのモデル校の方針からしても、かれには講壇教育学はかなり異質であった。それだけにドイツではいわばプラトンの国家論とアリストテレスの科学論の対立のなかでの教育学の位置づけがその肩にのしかかっていた。

5) 日本人グループとナトルプの死

1920年代半ばのマルブルク大学でドイツ人文科学の活況にふれた山下は、たしかに、ナトルプやコーヘンなどの新カント派にたそがれをみ、ハイデガーやブルトマンの曙光をまえにしていた。しかし、山下が聴講したハイデガーの存在論の方法やブルトマンの様式史的キリスト論の方法でかれが己れの教育学の方法論上の武装をするのは容易でなく、その壁は高かった。また、手帳に記されている三木清、鹿子木員信、姉崎正治、波多野精一、高橋里美、山谷省吾、長田新など、マルブルクに滞在したり訪れた哲学や宗教学の研究者をみるにつけ、直接聴講する機会をもったかれ自

身、マールブルクの精髓を教育学の行方にどう係わらせるか、あるいは取り込みうるかは不透明だった。

そしてかれは、時代、社会、哲学、自己のなかに、ペスタロッチのテキストからとりだした「聖なる闇」⁽¹⁸⁾をみていた。澤柳に宛てこの1924年冬学期のナトルプの授業テーマが「創造の哲学」(Philosophie der Schaffens)だ、と伝えた1週間後、しかもハイデガーの講義に出ていた7月24日にナトルプは死亡する。かれのもとに山下がきて11か月目であった、その間、個人的には招待や訪問で研究相談の機会をもち、この24年1月の誕生会などで会っていたが、公的にはナトルプの授業は健康上の理由で開講は困難であった。かれの死は、そのペスタロッチ把握に照準を合わせていた山下だけに衝撃は大きかった。ヴィゲットのような、前世紀のヘルバルト派はペスタロッチを教育方法家とみてきたが、ナトルプはそれに抗し、「自発性」「直観」「能力の均衡」「共同体」など、その社会的イデアリズムを前面に押し出しており、「創造の哲学」を講じる師とペスタロッチの「聖なる闇」のまえて、山下は苦悶する。

山下自身、ナトルプのイデアリズムと創造の線上にあらうとしながらも、ペスタロッチ像をめぐっては、結局、啓蒙的、礼讃的な伝記を評価し、それに使用した文献とて十分でなかった。それだけにペスタロッチに明暗両面でパセティックな感情移入を示すのは、いかにも山下の面目である。かれはペスタロッチの『レンツブルク講演』からは「聖なる闇」を、『白鳥の歌』からは人間自然に即する「心理的原理」をとりだし、その後期ないし老年期を注視した。のちに長田新のペスタロッチ論の下敷きにもなるナトルプの方向づけは、抽象度の高い構成論であり、いうならば青年ペスタロッチや国民主義者ペスタロッチの重視に傾いた。しかし、それには山下は積極的ではなかった。むしろその傍らで、かれは親日家として知己をえ、『聖なるもの』の著者で現象学的宗教学者ルドルフ・オットーから受容した「神秘的合一」の世界像にペスタロッチの「聖なる闇」を重ねて惹かれていく面があった。要するに、山下は、時代、思想、加えてマールブルクと彼自身、これらがみせる時代精神と心理が複合した一種の暗さにとらわれていた。

ドイツに向けた日本からの注目の方向とその程度に応じる形で山下が師や先輩へ書き送ったものは、成城の「教育問題研究」や玉川の「全人」で公表されている。しかし、この現地報告の内容とは裏腹に、かれは先の聴講、現地での見聞や接触で入手する情報、自身の葛藤や変化などで揺れていた。ナトルプから引き離された事態は、教育理論の上ではエルンスト・クリークの『教育の哲学』にも関心をもたせた。精神形式を全体的に形態化するクリークの機能主義と、その根底で魂と心霊(Seele/Psyche)を抽出可能とする枠組に山下は同調し、その考え方が自らの構想に「革命的意味を与えてくれた」、と帰国直前になって述懐している⁽¹⁹⁾。このため、当時、論争状況にあった、現象学の側からの新カント派リッケルトへの攻撃をかれは、「『学としての哲学』の哀れな胤合戦」とみ、

(18) 宮崎俊明：「1920年代日本の新教育運動…」註(1)，129

(19) 山下徳治：「イエンシュ教授の心理学とその教育との関係について」全人，1926年10月号，24

そのような「学としての哲学」は「聖なる闇」をとらええず、また「悲劇的人生とは全く没交渉の哲学」だ、と書簡形式をとった小原國芳宛ての「マールブルク報告」で不満と批判を吐露した⁽²⁰⁾。

6) イエンシュとその心理学の「マールブルク学派」

1924年夏のナトルプの死後、山下をマールブルク滞在させ支えることになったのが、心理学のアーリッヒ・イエンシュである。休みが明けた9月末、イエンシュを訪問、さっそく10月の新学年の冬学期から26年10月の帰国前までの4学期間をノートに示された次の8種類のテーマの講義と演習に参加する。24年の「心理学研究案内」と「心理学の哲学的研究入門」、25年夏学期の「心理学の基礎概念」と「思惟の層位」、冬学期の「心理学」と「情緒的思惟とそのタイプ」、26年夏学期の「哲学的人間学」と「人間学のために」。このうち、山下がノートに残しているのは、初回の24年冬学期の16回分、32頁だが、そこには心理学の科学性を主眼とし、多くの図録を用いての、心身の神経生理学的な説明、空間時間感覚とその法則性、思惟の層位と情動のレベルおよびその病理などが記されている。

イエンシュには、教育学が哲学から心理学へ、思弁性から実証性へとその基礎・隣接科学の位置を移行させつつあるパラダイム変容の前景がはっきりとみてとれる。同時にこれには山下自身の個人的内省も絡んでいる。かれには「哲学的研究と教育への態度には著しい変化がおりつつあり、
「教育の実際を指導しうる理論建設がわたしの中心課題であった。」⁽¹⁹⁾ この心境を、「道草を食うのだったら、なぜみどりの野にあって枯草を食ったのか」、とメフィストフェレスに嘲笑されたファウストに自分をなぞらえている⁽²⁰⁾。「道草」がマールブルク入り以来の約1年半をいい、「枯草」が哲学だったというのであろう。

山下はイエンシュのアイデティーク直観像理論 (Eidetik) に導かれて、ペスタロッチの直観論と児童心理への自分の理論的覚醒をしようとした。つまり、イエンシュが、ナトルプを新カント派の価値構成主義と「遠さの理想主義」として批判し、みずからの心理研究をとおして児童と教育文化の「近さの理想主義」をみてとる現実原理の優位を主張することに山下はめざめようとした⁽²¹⁾。イエンシュがいう、精神作用の外部総合型、内部結合型および総合型の類型からすれば、ディルタイ派のシュプランガーの「生の形式」の6類型論における経済型や政治型などは妥当性をもたず、むしろ排斥されるべきであった。

このイエンシュの方向は、当時のドイツ語圏での心理学、たとえばハンプルクのシュテルン、ラ

(19) 山下徳治：『明日の学校』1939, 47

(20) 山下徳治：「イエンシュ教授の心理学とその教育との関係について」全人, 1926年10月号 21~41

(21) Jaensch, E: Philosophische Grundlagen der Pädagogik, 1928, SS. 48, 17

イプティヒのクリューガー、ベルリンのヴェルトハイマー、さらにヴィーンのカール・ビューラーなど、多くの傾向が乱立するなかでのいわば「マールブルク学派」の直観心理学となった。このドイツ心理学の最盛期を山下にその目で確認させた機縁が帰国前に、3年半の滞独中のかれには初めてにして最後となる学会大会への出席であり、26年の10月上旬、オランダのクローニンゲンでの国際心理学会議に参加する。日本へのイエンシュの紹介を著書の形にして「日本の先生方にも知らせたい」と山下は小原に書いた⁽²²⁾。

4：マールブルク滞在中の迷いと自己評価

1) マールブルク大学の学風の転換点と日独間のパラダイム落差

上のように、山下がマールブルク大学でハイデガーの哲学、ブルトマンの神学、イエンシュの心理学の領域を知り、加えてナトルプ、オットー、さらにはハルトマンといったいわゆる有名教授の聴講をし、ブルトマンとハルトマンを除く4人からは実際に交誼をえたが、これらの事実は、この大学を代表するいわば新旧の大家との接触であった。ただ、当時、その知的生産の高場期にあり、のちに大きい足跡と影響力をみせるユダヤ系精神史家エルンスト・カッシーラについては山下のノートや論著のどこにもしるされていない。かれの聴講理由が学的関心と留学地での受容にありながらも、それがかれの研究に直接結実したとはかならずしもいえなかった。そこには外国での新傾向の紹介が個人交流を優先させて進めがちな日本の受容特徴の表れの一端があり、加えていえば、異郷で同国人が集いがちなアジア的特性もあった。逆に、すでに日本の教育学論壇でいわれはじめていた傾向だが、かれがドイツでアメリカの動向把握をデューイに照準を合わせ、その購入をエルバート(Elwert)書店⁽²³⁾に助けられてすすめていた意味は、後年のかれの著作の進展からすれば小さくない。

約1年間の語学研修と、ナトルプやベスタロッチの読み込みのあと聴講許可をえた山下にとって、その後2年半のマールブルク大学での学問受容は、次の3つの領域からなっていた。1)現象学的解釈学的哲学とその方法にも依拠した新約聖書神学：ハイデガーとブルトマン、若干の関連では、聴講は途中放棄した認識論：ニコライ・ハルトマン 2)アイデティーク(直観像)問題を解明する実験的実証的心理学とそのこども理解：イエンシュ 3)新カント派の哲学的教育学と、社会学を母科学とする教育学：ナトルプほかである。加えていえば学校視察や学会参加もある。これらの動機や背景には、哲学の場合は知名度の高いハルトマンの認識論、山下個人のキリスト教信仰と結びつくブルトマンやオットーの神学ないし宗教学、なかんずくナトルプの教育学があり、その若干はかれが日本から持ち込んだものだった。とくに、ナトルプには、山下がマールブルク入りをする前年の

(22) 山下徳治：「イエンシュ教授の心理学とその教育との関係について」全人、1926年10月号、40

(23) グリムの『メルヒェン』初版本を出したこの有名な書店をかれはつねに「エーベル」と表記している。また、その手帳では当時の出版の中心地ライプチヒに目配りもしている。

1922年に成城関係者の澤柳と長田らが訪問し、日本からの熱い視線が注がれていたし、死後、その蔵書が山下の仲介で成城に移るほどに、強固な関係があった。一方、ドイツ哲学の最前線にあるハイデガーや、特徴的な心理学を構築しつつあったイエンシュについては、現地で喚起された見聞や事情の結果だったといえる。オットーについてもその民族宗教への関心には日本の神学者や宗教研究者との連携があり、山下も紹介されてその圏内に入り、『世俗倫理学』の著書を贈られたりしている。かれが「教授」でなく「先生」と書くのは、ナトルプとオットーのふたりだけである。

哲学、キリスト教学、宗教学などの分野の優秀な在外研究者をまえにすれば、山下の学校歴や現職は、その教育学も含めてむしろ見栄えはしなかったであろう。かれは、親交をえた三木清の才能には驚くが、反面ではそれによって奮起し影響や支援をえたことは、その後のかれの転職や出版機会が物語る⁽²⁴⁾。ただ、新カント派の影響下で現地に入ったこの教育学徒は、自らのポジションを現象学の方へ移そうとはしなかった。かりのそのシフトをとったとしても、のちに本国で登場する講壇哲学者の余技に類するような教育分析はかれの欲するところではなかったであろう。世紀初頭の心理学の興隆のもと、事実、ドイツでも『哲学的教育学の終焉』（クレッチマル）がすでに出ていたし、日本国内でも「ナトルプかデューイか」は20年代の教育学論壇の潮流の標語となっていた。山下自身、マールブルクでデューイの蒐集に努め、ナトルプの『ペスタロッチの理想主義』の翻訳も上梓に至らなかった事情が発生するものの、24年2月段階で仕上げていた。

2) ミュンヘンへの関心と心理的負荷

山下が、ナトルプの死に直面する時期は、滞在期間40か月の15ヵ月目、語学研修期を除く聴講期以後では、30ヵ月のわずか4ヵ月目だった。哲学的教育学に立つか、心理学的、社会学的教育学へ移るか、マールブルクにとどまるか、あるいは出るか、山下は岐路にたった。このことは、移動について揺れ、ミュンヘン大学とその地の調査をしているノートで裏付けられる。山下にはその教育研究でミュンヘンが魅力的なのは、以下の点からも明らかであろう。そこにはデューイとの近さをみせ、現実的な新教育で浮上していたケルシェンシュタイナーと、有力誌「教育」の創刊号に規範的教育学から記述的教育学への転成を説こうとしていたアロイス・フィシャーがいる。また、ペスタロッチのスイスにも近く、山下が使用するそのテキストの編者のザイファルトもいる。かれらは人口わずか2万余のマールブルクとは対照的な30万都市ミュンヘンで活動している。この都市なら心理的生活的な開放とかれが好む音楽や美術の機会や刺激があるかもしれない。それに、小説好きの山下は、ストリンドベルクとイプセンがミュンヘンを訪ね、一時居住をしているのを確かめ、ゲルハルト・ハウプトマンとヘッベルを「ふたりのリアリスト」、と手帳に記したりしていた⁽²⁶⁾。

(24) 宮崎俊明：「1920年代日本の新教育運動…」註(1), 126, 130

(26) かれの文学関心か、ドイツ語の勉強か、その目的は不明だが、「台所の鍵」の名をもつ短篇小説の邦訳を試み、ひとりの女性の心理を瞥見して、ノート10頁分に記したためている。

山下のミュンヘンへの注目でもう一点留意されるべきは、ミュンヘン大学にいる精神医学者オットー・ブムケ (Otto Bumke) の論著のメモを作成していることである。精神病理へのかれの関心は、ノートにあっても「癲癇」「症候」「無睡遊病」の原語、「精神分裂病」といった病名、それに精神病理学者のプロイラー、クレチマー、ビンスワンガーの人名スベル、日本語医学事典などにみとれる。ただ、この領域へのかれの関心は以前にはなく、以後にも類種の論考はない。これが山下の学問的関心か、個人事情かの即断は注意すべきだとしても、研究関心でありえないのは、頻出するフロイトの誤記やその蓄積の不十分さからもいえる。かれは、心理的に追いこまれ、自己を追いつめていた。(後述：6)

3) 滞在報告と滞在延長

結局、山下はマールブルクを出なかった。そして同じ哲学部内にある心理学のイエンシュのもとに移り、帰国の1926年10月まで4学期間その授業に参加、実験色の濃いその研究室に2年余りいることになる。これは、教育学の関連領域を哲学から心理学へ傾斜させることや、これまでの日本人研究者や当地での知日家の教授たちの交流圏に距離をおくことを意味した。いいかえれば、ドイツにおいて日本人サークルや特定の狭い被保護圏にではなく、ドイツ人のなかにはじめて入る、という自立への変動だった。その時代とかれの現実にあってかれが担った荷の重さは想像に難くない。

ただその一方で、山下自身は、イエンシュの心理学がペスタロッチの直観論の理解に新しい光を投じることや、この町でできる学校教育の参観がマールブルクに滞留することになった理由だといっていた。イエンシュのもとでの2年間についてその助手 (H. Freiling) と交わした問答を小原國芳に書き送り、次のように公開されている。「或時彼はさう申しました。ドイツの教育学もイエンシュの心理学に因って革命されなければならぬと。わたしは其の言葉を不遜だとも僭越だとも思っていません。寧ろわたしは『それはほんとうだ、そうあって欲しい』と思ひました。彼は或はかう話したこともありました。『あなたは幸福であった。〔中略〕イエンシュ教授のもとで二カ年勉強されたことは幸福であった』と。それは又私自身のまことに偽らない告白であります。」⁽²⁷⁾

5 : 学校訪問と学会大会への出席

1) マールブルク北小学校

帰国数ヶ月前の1926年夏以降、山下はドイツの学校教育の現実や新傾向に関心を示し、イエンシュとその門弟の紹介で新教育 (Reformpädagogik) の実験学校について見聞や参観をしようとした。

(27) 山下徳治：「イエンシュ教授の心理学とその教育との関係について」全人、1926年10月号、40。なお、この〔中略〕には当時のドイツとオーストリアの著名な心理学者やシュブランガーとヤスパースなど8人が列挙されている。

そして実行したものを成城の「教育問題研究」や玉川の「全人」に報告した。山下には息子卓がマールブルク南小学校に通っていたが、ノートにはこの学校の様子は書かれてはいない。かれの学校訪問の最初は、公立のマールブルク北小学校、戦後は中等教育のフリートリヒー・エーベルト実科学校となっている学校から始まった。ただ、ノートではめずらしい以下の記録は、この学校参観の手続きの複雑さと登校までの感慨を記しただけでおわっている。

「1926年6月10日、マールブルク北小学校を視ル。マールブルク南小学校とちがって北小の校長ショルツ (Scholz), イエンシュ教授のもとで学位をとったノルテと共に新しい心理学を研究する立場から、殊にまたドイツ一般に可なりな力を以て生長しつつある労作共同体の方法を取入れて新しい教育を試みつつあるときだから、話の聞き取り (hospitieren) などが気になったのである。然しここでは内地〔日本〕でのように学校を見るにも簡単にいかず、先ず最初、イエンシュ教授の紹介状を添えた願書を学校評議会に提出して学校参事と、更に文部大臣の許可を得てから初めて参観が許されるのでなかなかてまがとれてならぬ。然し、まあ要するにこれだけすませれば安心して参観できるので安^い心持ですぐ観ることはできるこの日はマールブルクには珍しい程雨の降っている朝だ。下宿から学校へは七、八分、途中で子供達、二、三十人〔に〕出逢った。オースター〔復活祭〕に入学したばかりの子供達は、未だ幾ら〔なん〕でも主知主義的教育でこわされない自然の〔2字不明〕巧さがみられる。君は何年生かと聞くと erste Klasse〔一年生〕といった。君の先生は Dr. ノルテかと聞く〔と〕、Ja〔うん〕といった。今日はオッター教授の講義の始まるまでの2時間参観したいと思ってノルテの組の子供達が懐かしく思えて急いだ。直ぐ校長室の戸を叩いて来室を告げると、既に学校評議会から通知を得ているとのことだ。直ぐ今日は2時間 Dr. ノルテの組をみたいと希望を申し出て案内をして貰った。」

学校参観のために山下がとったもうひとつの行動は、その2ヵ月余りあとになる。それは帰国のためにマールブルクを引き払って1ヵ月半ベルリンにとどまり、そこを拠点にドイツ北部とオランダをまわったときだった。この様子はかれが先方に出した手紙の写しで分かるが、訪問はワイマール、マグデブルク、ブレーメンでは達成できたが、ライプツヒ、ドレスデン、ハンブルクでは思いどおりにいっていない。それにこれらの機縁を作り、連絡などで援助したひとりがイエンシュの第一助手といってよい先のフライリングである。かれは師の理論を学童を対象に実験的に検証し、その芸術教育への応用をめざしていた⁽²⁸⁾。山下は、この方向を成城でも実践するよう提言したりしている⁽²⁹⁾。

(28) Jaensch, E.: Über den Aufbau der Wahrnehmungswelt und ihre Struktur im Jugendalter, 1923, S. 273~356

(29) 山下徳治: 「イエンシュ教授の心理学とその教育との関連について」全人, 1926年10月号

2) 新教育 —イエンシュの直観像心理学にたつ—

山下の学校参観の意図は、ひとつにイエンシュの心理理論をその実践校で確認すること、もうひとつに「新教育」の動向を把握すること、このふたつにあった。前者についてはワイマール近郊のいわゆる田園学舎で活動する美術教師（Heckmann）の授業を参観したが、山下は先方への返信の形で10月4日ベルリンから礼状をだし、写真をそえてこう書いている。「わたしはあなたのところで美しさと新しさをみました。自分の教育観に重要な着眼点を見出しました。」また、マグデブルクの実験学校の美術教師（Ziel）らの授業についてもその紹介の労をとったイエンシュにベルリンからの8月30日付きの手紙で、次のような感想をしたためた。かれらは図画授業だけでなく今後の教育に「新たな道」を拓いている。その授業では「素朴な児童画がもつ内面性とその描き方が、教育方法上全教科にわたって展開する変化をみました。この授業と人間教育はあなたの心理学の基盤にたつて全面的に変革（*revolutsiert*）されるはずです。」

この1920年代の教育は、欧米の新教育の状勢、ソビエト革命後の政治・労働教育、日本の大正期の自由教育など、一大変動期にあった。総じて日本からの在外研究者や海外視察者もその教育事情を実質的、形式的に把握し評価しようとしたが、山下とて例外でなかった。かれが2回目の渡航をする1928年のパスポートにも「教育視察ノタメ支那、ソヴィエト連邦、波蘭〔ポーランド〕及び独逸へ」と記されている類である。この初回の長期滞在のときのノートや手帳にも、視察にかかわる下調べや面談中の相手の筆跡も含めて、そのアドレス、人名、学校名、文献名などが、随所にしばしば登場する。かれが着目したのは、ベルリンのベルトルド・オットーの総合教授、ハンブルクのヘーゲの共同体学校、ブレーメンのシャレルマンの体験教育、ミュンヘンのケルシェンシュタイナーおよび、既に死去していたライプティヒのガウディヒの労作学校などである。また、マールブルクと同じヘッセン州のフランクフルトやカッセル、加えて距離にして比較的近いエルフルトやゲッティンゲン、これらの学校の校長とコンタクトをとろうとした形跡を示す記入内容も手帳にみられる。しかし、連絡がとれ、実際に訪問できたのは、帰国前の旅行もかねたブレーメン、マグデブルク、ドレスデン、ライプティヒ、ワイマールのうち前二者の場合であって、イエンシュのツテの場合しか実現していない。その視察対象や報告内容は、かれの3年半の滞在期間や教師としての経歴や成城での現職身分からすれば、決して多くはなく、むしろ少なかった。ひとつには着手の時期があまりに遅すぎたというべきだろう。かれにはマールブルクの外へ出ることに抑制や抵抗がかかりすぎ、ドイツ各地の学校・研究者訪問や学会参加のような教育・研究上の用件を満たす機縁や情報をもたなすぎた⁽³⁰⁾。

(30) 対象に対するかれのエクリチュールの過剰がそれと無関係でないのは、己れを受容課題と先方の伝播戦略とが合体するところにみられる、いわば一般現象であり、この傾向はむしろかれの訪ソが示すとおりである。宮崎俊明：「1920年代日本の新教育運動…」註(1)136～138；Derrida, J.: *Moscou aller - retour*, 1995, 土田知則訳『ジャック・デリダのモスクワ』1996, 103～105, 133～135頁；亀山郁夫『あまりにロシア的な』1999

それだけに先のマールブルク北小学校のときの記述には意味があり、山下が感じていた壁の高さを物語る。かれがヘッセンの外へ出る困難さやその行動範囲の狭さは、その手帳にかかれたメモや地図からも分かる。かれはブレーメンの訪問記の題名を「北欧」とするほどであり、南ドイツのシュットガルトの自由ヴァルドルフ学校の本部に参観依頼状を出したり（1926年6月23日）、ドイツとスイスの国境にあるドルナッハのシュタイナー学校にも関心をもったが、いずれの訪問も実現できなかった。

1927年1月のペスタロッチ没後百年記念の文章を書いた山下だが、なにより滞独中にペスタロッチの故国スイスを訪ねる機会はずらに終わっている。シベリアまわりで帰国するためベルリンにきていたかれは、たしかに、シュプランガーを訪ねた。しかし、このデイルタイ派の文化教育学者のペスタロッチ把握やかれがスイスと共同ですすめていた没後百年事業のための批判版テキストと「ペスタロッチ研究」の刊行、なにより最新の多くのペスタロッチ研究の蓄積にも留意せず、ただ1926年に8巻本のザイファルト版（1899）を入手した程度である。また、マールブルクは、視覚障害者の大学進学にドイツで最初に道を開き、ドイツ最大の点字図書館をもつ町だが、それにもふれず、現在の大学の学生寮名にもなっているビザルスキーが指導するベルリンの学校を紹介されながら、その訪問も実行せずに終わった。一言でいえば、これは山下に限ったことではないが、現地本場にいながらその変動を質量両面で追及しがたかった在外研究者の限界をかれもまた示している。

3) 第8回国際心理学会議と北ドイツでの研究旅行

山下の学会参加への関心がはじめて現れるのは、1926年8月30日付イエンシュ宛ての手紙においてである。それは、一週間後の9月7日にオランダのクローニンゲンで開催の第8回国際心理学会議に参加し、イエンシュの発表部会に出席できるかどうか、というベルリンからの唐突とも映る問い合わせであり、折り返しその返事を電報で求めたものである。書面には、イエンシュのアイデティーク（直観像）論をめぐる設定された部会の次の5件の題目も列記されている。冒頭は、イエンシュ本人の「アイデティークの研究方法」、次にキツソウ（Kisow, チューリングゲン大学）の「アイデティーク批判」、続いてスコラ（F. Scola, ベルリン大学）の「アイデティーク現象の理論」、最後にガッチ（A. Gatti, ミラノ大学）の2件「ポッケンドルフの錯覚」および「アイデティーク現象の一試論」⁽³¹⁾。

山下はクローニンゲンに少なくとも5日間は滞在し、3人の日本人参加者に会っている。かれ

(31) 山下徳治は「全人」の1926年11月号（56頁）でこの会議を報じているが、「チューリングゲン」大学は実在しない。また、ノートでは、“Turin”とあるが、この地名には大学なく、かりにThürinならチューリングゲン地方のイエーナ大学だろう。あるいは誤記による、「チューピングゲン」か。「ポッケンドルフ」は平行の錯覚、「一考察」は「若干の（einige）考察」のミス。

が参加した理由のひとつは、著名な心理学者の講演を直接聞くことにあった。その印象をかれは、マールブルク滞在中にドイツ語とギリシア語の個人教授や、学校参観のアレンジを受け、夫人なか、息子卓とも家族ぐるみの親交をもった学生フランツに10月3日付でベルリンからこう書いている。「会議は、わたしには実り多いものでした。とくに意味があったのは、ウイーンから夫妻で来たK. ビューラー、ハンブルクからのシュテルン、ベルリンからのシュプランガーとヴェルトハイマー、かれらの講演を聞いたことです。また、パリから来たジャネもすばらしい講演をしましたが、残念ながら十分理解できませんでした。現代フランスのジャネ、ペロン、クレパラードの心理学も立派なものでした。」

このように帰国直前のベルリンで会議参加や研究者訪問の関心を強めはじめた山下は、ワイマールでの行政主導の教育会議の開催を文部筋から聞いた。このため、その主宰者で当地の実業学校長キュール (M. Kühn) に宛て、広島「福島教授」とともに参加したい旨、申し込み締切後に照会したが (1926)、出席したかどうかは不明である⁽³²⁾。

8月末から10月16日までベルリンを中心に滞在した山下は、先の心理学会議に発つ前日にシュプランガーをその自宅に訪問、話は2時間におよんだという。また、八大教育主張の雄、千葉命吉とともにベルリンで右翼の団体を作った九大教授鹿子木員信がキリスト教関係の寮におり、一時期かれもマールブルクいたためにそのアドレスを山下は手帳にひかえている。しかし、鹿子木と会ったかどうかは興味深い、シュプランガーとの面談の内容とともに詳らかでない。さらに、山下とは学歴、職歴、外国滞在歴では類似しながらもイデオロギーで対照的な千葉が、当初はシュプランガーを引受人としながら疎んじられて3年間ベルリンにいたが、そのかれが知られている文化教育批判の著書だけでなく、シュプランガーにも読み取れるドイツ語の出版物をだした (1926, 1924)。また、死去寸前のナトルプにも議論を吹きかけるような手紙をだしていた (1924年7月6日)⁽³³⁾。しかし、山下はこうした千葉とベルリンではもう会えなかった。山下がベルリンにきた丁度1年まえに、千葉は、シュプランガーに「9月15日に日本に帰ります。ついでには会って話したいので13日か14日はどうでしょうか。都合よろしければ、その時刻など返事をください」と猿を描いた日本画の絵はがきで問い合わせにし、すでに帰国していたからである⁽³⁴⁾。

(32) もし、出席していたなら、この時期、手紙の交信を几帳面にノートに控えているから、礼状はあるはずだが、ない。また、この時期の国際心理学会議の参加の報告にも記すはずだが、それにもない。不首尾に終わったのであろう。

(33) 宮崎俊明：「1920年代日本の新教育運動に…」註(1) 116～119

(34) ナトルプやシュプランガーとの千葉の交流でドイツ側に残るこの2通の手紙は、前者はマールブルク大学の「ナトルプ文書」(MS. 831. N. Natorp der Universitätsbibliothek Marburg)、後者はコブレンツのドイツ文書館の「シュプランガー文書」(Fundbuch-N. 1182 (Spranger), Bundesarchiv Koblenz)の所蔵のものである。

なお、山下の手帳には唯一、次のソ連関係の図書が登場する。「カメネーヴァ監修、ソ連対外文化連合協会編『ソ連案内』、国家出版、1925年、モスクワ発行」というドイツ語本がそれである⁽³⁵⁾。山下が、この書物を10月16日にシベリアまわりの帰路でベルリンを発つために、実際に入手したのかどうか、事実、その2年後に入ソするだけに興味深い、明らかでない。少なくともかれの関心の所在の一端はみえるというべきだろう。

6：マールブルクでの日常

1) 日本人との交流と交信

当時のマールブルクには数人の日本人留学者が出入りし、なかでも三木清と羽仁五郎というふたりのリベラルとの関係が帰国後も含め山下に影響と支援を与えた。日本国内では小原國芳との関係は圧倒的であり、かれのもとからナトルプの著書『社会的教育学』の翻訳出版の許可を乞う依頼状を山下が代理で書いたりした。さらに小原のペスタロッチ選集の刊行企画に自らも参加したが、この山下の労は帰国後水泡に帰した⁽³⁶⁾。ただ、澤柳政太郎、小西重直、長田新の、いわば成城・京大関係者とはマールブルクをめぐっては順調だった。

山下の個人的な一面として、その音楽好きがあった。すでに師範時代のヴァイオリンを手にしていたかれは、東京では音楽評論家田辺尚雄と交わり、賀川豊彦に可愛がられていたが、本場に入って、その音楽関心は高揚する。モーツァルトやワーグナーのオペラ、ベートヴェンの演奏会に感激し、手帳にそのアリアの一部や、「アイダ」の登場人物を書きとめている。それにイエンシュに頼んで中学の音楽教師の紹介を受けたり、1925年11月25日付けの手紙では、姪のベルリン音楽大学への留学の可能性を詳細に問い合わせたりした。⁽³⁷⁾

2) 小原國芳との訣別

1926年初頭、山下は成城に帰国の半年間延長を申し出て、小原からの電報で一応了承された。この手紙の3ヵ月後の4月、山下は、帰国後のペスタロッチ論⁽³⁸⁾のライトモチーフとなる「聖なる闇」に自分を重ね合わせたところにいた。とくにそれを私信の公開という形式をとった山下は、その最終頁でショペンハウアーとニーチェの名をもちだしながら、前者の悲観論よりも後者の力の論理と、「もののあはれ」や「女性の主情主義的感情」とのあいだで揺れながら「ファウスト」の前に行こ

(35) Gesellschaft für Kulturverbindung der Staatsunion mit dem Auslande unter Leitung von O. D. Kamenewa (hg.): Führer durch die Sowjetunion, Moskau 1925, Staatsverlag

(36) 宮崎俊明：「1920年代日本の新教育運動に…」註(1) 123

(37) 山下徳治：「新しき音楽教育を聞く」全人、1928年4月号、16, 17

(38) 山下徳治：「教育の本質より見たるペスタロッチの教育思想」全人、1927年1月号、19

うとして苦しんだ。小原は、後輩山下に「世間」を説いたが、逆に山下は小原への返信で、「併し小原兄、世間がどうあらうと、私は今のまゝで行かして下さい」と書く。「世間に反抗するのではない」、「悔ひ改め」があるとしても「別問題」であり、ただ、「私は運命を超えるために唯今としては運命に聴従であるより他に路を知らないのです」と応え、さらに次のように書いた⁽³⁹⁾。

「教育界から破門されても、道德上の前科者と罵られようが、今私の内に目覚めて来た大きい抱擁力を私は押し隠すことが出来なくなったのです。山路来て何やら床しすみれ草。私は今此の歌の心を私をそしめる人の中に見ることが出来るやうに思ふのです。今日の兄の御高恩はその意味からも私には二重、三重なのです。私は兄から蹂躪されても尚満足であるべき理由をよく知っています⁽⁴⁰⁾。」

3) 身辺の心象 — たった一頁の手記 —

上のような山下には後年のかれを想像しがたいが、反面ではドイツ社会に残る心理的な「戦争後遺症」や教師の大部分が非キリスト的だとする教員組合の報告にショックを受けて、それをノートにメモをとったりしている。なかでも、たった1頁だが手帳に記されている次の手記は、マールブルクでのかれの家族、居住地区、わけてもその心理状態を示してきわめて興味深い。

「昨夜はふとしたことから、よく眠れなかったので夜明け頃になって、ただ訳もな眠くてならなかった。それでも堤防のところのルプレヒト君の家に行くやうに約束してあったので、卓が学校へ出掛ける音に目を覚まし、そのまま跳ね起きて終った。朝粥もおひしくはなかった。E. Kriek の *Philosophie der Erziehung* [クリーク：『教育の哲学』] を拾い読みしていると、鈴が鳴った。マハチェが来たらしい。[3字不明] そして今日、郵便脚夫殺しの犯人が近くの監獄で死刑になるのだと話していた。何気なしに家を出たわたしの心には夜来の問題よりか、何か新しいことが起りつつある [3字不明] になっている様に感ぜられた。

疲れたので電車で南停車場へ急がう思ひバスの停留所へと急いだ。短い横道を抜けると、向かうの角が *Gefängnis* [監獄] だ。町の真中まで鉄柵があり、あらゆる室には更に [1字不明] 具のやうな小さい小窓が備えつけてある。多分空気を入れるためだらう。大学の行き帰りわたしはその窓を眺めるのが習慣になっている。町の騒音の間を歩くよりは、わたしは此の静かな *Gefängnis* [監獄] [以下次頁なし]

上の文章は、初期講義ノートとは違う、教育論メモの最終ページにあり、そのあとはない。破棄

(39) 山下徳治：「海外だより — マールブルヒの思索 —」全人，1926年8月号，73

(40) 山下徳治：「海外だより — マールブルヒの思索 —」全人，1926年8月号，74

の可能性が高い。筆跡も筆記具もちがう。クリークを読んでいることからしても帰国の1926年のはじめであろう。この文章の記述は、26年1, 3, 4月に小原に出す手紙の滞在報告などの具体的内容や、心情的、告白的な調子と異質だが、かれの日常場面の内部心理を裏書きし、時期も離れていない。事実、かれは大学教会などのミサに出席し、その3回の説教内容を記録ノートに書き残している。山下はその宗教的愛と「哲学的必然」とを結びつけようとして、自ら苦悩を背負っていた。その一方で哲学、心理学、精神病理学への関心の前で、自身の輻輳した内面生活と向き合っていた。

マールブルク滞在中の遺品ノートで山下が書き残している日本語の文章は、上掲の学校参観記1頁、児童期の心理をストツとイエンシュをふまえた論考の断片9頁、同じくペスタロッチの究明と実践を教育と祈りとの格闘とみる論考の断片1頁、ペスタロッチの『レンツブルク講演』の冒頭数頁の下訳3頁、「思想」36巻1924年10月号の抜き書き1頁、短篇小説の試訳7頁、そのの古代和歌集2頁、仏典の戒律体系1頁その他であり、この約40頁分は全650頁のうちの僅少部分である。しかし、上掲の手記は、これらの研究的内容やすさびの類とは全く異質であり、かれの内面の心象を垣間見せる。

4) 山下徳治—その病理・思考・教育・葛藤・学問と人間の究明図—

マールブルクの山下は、教育問題を歴史的、社会的にではなく、哲学的、世界観的、信仰的に問うところにいた。そして、その思想および信仰と、自身の心理的実存との和解のためにかれは苦悩の場面に追いやられている。フロイトとヤスパースの名が数回、くわえてビンスワンガーの名も登場するが、これらはかれの研究対象の域や水準をこえており、むしろ自身の苦悩の解明を求めるひとつの道標であった。その関連で手帳には山下の認識、意識、心理、学問などを一覽させるものとして興味深い、次頁に掲げる究明図が見いだせる。

いうまでもなく、この図には、抹消や誤記⁽⁴²⁾、意味不明瞭な箇所もある。しかし、そこには山下の意識、思考、心理を暗示させる言語や、わけてもその葛藤が見て取れる。まず、冒頭の左側の頁の上には「癩癩」「無睡遊者」「徴候」「徴候的」の4語のドイツ語が登場する。かれは「主観〔体〕(S)、客観〔体〕(O)」でもってする認識論的パターンに執着して、その対立、相互性、同一性の三つの方向性を定式化し、「能動的、思弁的、神秘的」と類型化する。しかもこの神秘的方向を「愛しながらの理解」として「教育の意図」に結びつけ、「教育の目的」と方法のみならず、思考も含めた規範性を問い掛ける。また、教育機能を、下位から順に「陶冶、形態化、形成」で位相化する。以上には、「ヤスパース」、ハルトマンおよびクリークらのとらえ方が導入されているとあってよい。

(42) Juspos (下線) は Jaspers であろうが、Ludorf は、人名 Rudolf であり、ノートに登場する人名では、ブルトマンとオットーだが、内容からして、このふたりにはあてはまりにくい。

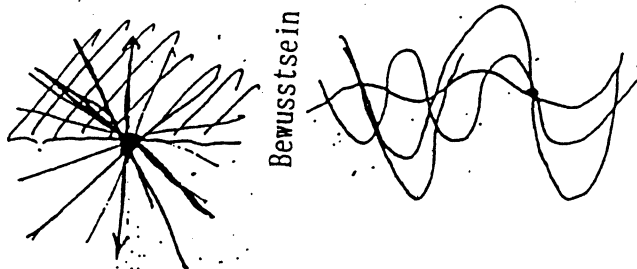
山下徳治による病理・思考・教育・葛藤・学問と人間の究明図（解説）

Epilepsie 癲癇 Symptomen 徴候
Somnambule 無睡遊者 symptomatisch

Juspos

dünamisch
motorisches Denken auf etwas
ausdehendes Denken gericht
emotionales Gefühl W
vorstellendes individu Intellekt
abstraktes produktiv
Wiederhollen Analyse

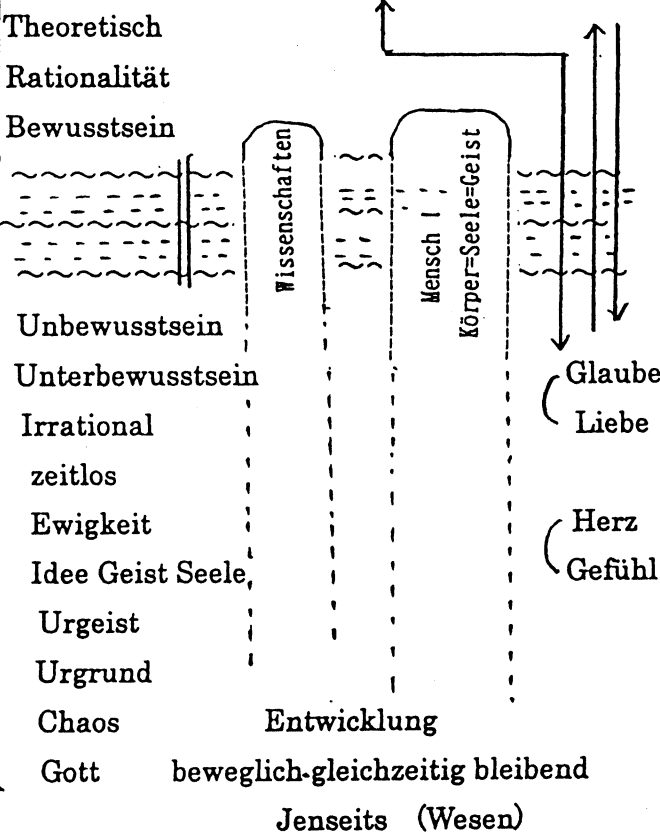
zeitlich
sichtbar
messbar
vergleichbar Diesseits
Natur
Experimentale



Technismus(Zweckmässigkeit) durch Scham
Mechanismus durch Identität
Historismus bewegt-vergleich Erkenntnis
Psychologismus Empfindung Philosophie
Loigismus Wachstum Verstand Vernunft
Begriff Funktion

- 1) aktiv S → O Macht
- Real → Zweck → SO Gewalt
- 2) kontemprativ S → O Liebe
- 3) mystik S = O

Bewusstsein
liebenden Verstehen
kannt nur dabei
nur erzi. Absicht
Wie man erziehen soll? Ziel bei
Wie man denken soll? Erziehung
(nicht gefragt nach
erzieherischen Phänomen)



L(R)udorf
Formung
Gestaltung
Bildung
Wesen → ganz Gestaltung

Gott beweglich-gleichzeitig bleibend
Jenseits (Wesen)

山下徳治による病理・思考・教育・葛藤・学問と人間の究明図 (翻訳)

Epilepsie 癲癇

Symtomen 徴候

Somnambule 無睡遊者 symptomatisch

ヤスパーズ

ダイナミック

時間的

運動的

拡充的

情動的

表象的

抽象的

なにかに向けられた思考

思考

感情

個別的知

生産的

反復分析

権力

1) 能動的

主→客

現実目的 主客

暴力

愛

2) 思弁的

主→客

3) 神秘主義

主=客

愛しながらの理解が

教育意図を捉える

意識

いかに教育すべきか

教育目標 (教育現象にそい

いかに思考すべきか

問われていない)

ルドルフ

形成

全体化

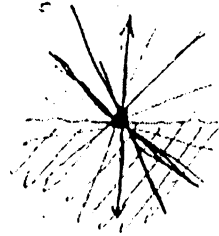
陶冶

本

質

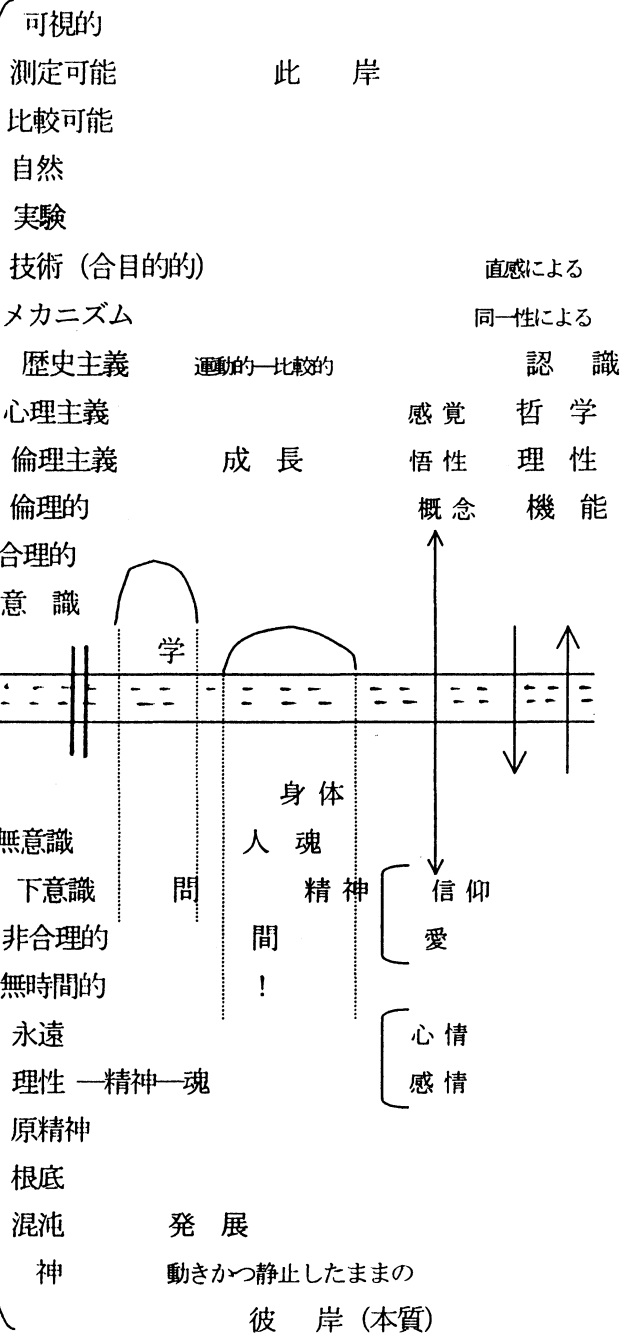
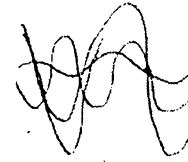
全

体



意

識



一方、右側の上部は、「意識」を上方への志向性と下方の暗やみ、およびその交錯ないし破綻を图示している。その下の一覧は存在のレベルを「此岸」と「彼岸」とに区分して、前者の上方を「学問」、後者の下方を「本質」とし、その中間に「溝」をみて、相互の間のいわば架橋や移動の可能性を描く。しかも「学問」と、「身体-心理-精神の統一体としての人間」をまたがらせ上方を実線で、下方を点線でわくづけた。そして、上方の実線の域では「学問」が人間の「感覚、悟性、概念」、さらには「認識、哲学、理性、機能」でいとなまれ、下方の点線の次元には「信仰、愛、心情、感情」のいとなみがある、とした。

この二元化され二層化されたふたつの域では、次のような特質がかなり任意に書き込まれる。一方の「此岸」の学問営為は、「時代的、可視的、測定と比較可能」なところで進められ、その対象や立場には、「自然に対する実験、技術、物理」や、「歴史主義、心理学主義、論理主義」の立場があり、これらは「理論的、合理的、意識的」である。他方の「彼岸」の学問と人間把握は、「神、カオス、^{ウルガイスト}原精神、理念、永遠」にかかわり、「超時間的、非合理的」であり、それは「無意識的、下意識的」である。

しかし、山下はこの双方を左頁にまたがる位置に「意識」と書き込んでいる。これがかれの世界に苦悩、葛藤、錯綜をもちこんだ。そのことを端的にみせるのが、右頁上方のふたつの線描図に他ならない。この座標化された左の図では垂直に学問と人間とは相関して機能し、上方とともに下方の塗り込まれた次元にもその営為がある。だが、その右の図はこの運動と営為の錯綜であり、しかも、両者の間に「意識」とかきこまれている。ここに、学問論としては人間学的断層をのぞきこみながらも、なおその哲学的な意識主導の方向をとろうとする山下がおり、かれはその知的、実践的な苦悩や苦闘、さらには心理的な葛藤に直面することになった。

5) 町のトポグラフィーの新旧 — 「監獄」の現実とそのメタファー

上の究明図からすれば、先の「監獄」の手記でみせた山下の「不眠」や「何か新しいこと」の、構造要因も抽出できよう。不眠と眠気が交錯しているときにおこった息子の物音による起床、しかも家婦の口の端にのぼった、その日にある犯罪者への死刑執行の噂。なかんずく、かれが住む地区は、中心街とそこにある大学からはなれてラーン川東岸のはずれにあり、大学の行き帰りに監獄の塀のもとを通り、その小窓をみるのがかれの日常であった。ことにその日は己れのなかにある心理的暗やみが刺激されたことは否めない。その深層は、意識的行為としての学問の限界域をかれにみつめさせていただきではない。当時、直面し、訣別に至った小原との件や、とりわけ日本の教育界を見つめさせていたといえよう。

山下がマールブルクに来た当初は、現在も中心街の「大学通り」を一筋入ったラーン川畔フラン

クフルト通りにいたが、その後転居したのが上の手記にあるマールブルク南駅近辺である。いまはそこには監獄はなく、マックス・プランク研究所の精神医学部門とその病棟がある。その南方、近くのカベル地区は、400年前のルターとツウィングリの来訪やエリザベート教会などで伝統的にプロテスタント系が多いマールブルクのなかでは少数派のカソリック系地区であり、いまなお黒い民俗衣装をはなさない老女が目立つ。「ナトルプ通り」もそこにある。さらに、南駅から傾斜地を東に2キロほどのぼっていくと、現在は50世帯が入居している大学のゲストハウスのブロックに至り、その高台がラーベンシュタイン〔烏石〕である。そこが、直下にユダヤ人墓地と、はるかに市街地をみおろし、かつ西方の城と向き合っている旧処刑場である。その銘版には殺人のかどで処刑された男の名とともに最後に使用されたその日付として1864年10月4日が刻まれている。

7：まとめ

以上、山下がドイツに滞在した3年半、1924年4月下旬から1926年10月上旬までの期間に記したノートを手がかりにして、かれの学的関心とその変動や心理的位層に踏みこみ、その再構成を試みた。このノートは、手紙も含めてかれの聴講、研究、情報収集、交際、手記など多岐にわたる領域の記録、しかも定型のない、個人的私的な記録、さらには行動の計画や成果の記録であった。それだけに、このノートは、山下が発表した論著や公開した書簡にはみられない、あるいはそれと整合しにくい事実やかれに潜在する心理や思想の次元を垣間みせていた。

山下の渡航目的は、外国の教育学ないし教育の受容にあった。かれは私学教育や民間教育運動のトップランナーである成城学園から派遣され、その関係者に支えられていた。外国受容は日本の教育の近代化に通底する方向だが、山下が滞在した、日本の大正期後半にあたる一次大戦後のドイツの1920年代中期は、かれ個人の外国指向とそこでの哲学的学問関心を高揚させる好機であった。かれは、マールブルク大学という小さいがドイツを代表する大きな知的空間にあり、そのいわば受容専念義務をはたそうとした。

ただ、ドイツ人文科学の転換期のなかに入った山下の受容方向は、教育の基礎科学についても社会学的知見にふれる一方で、現実にはナトルプからイエンシュへ、哲学的教育学から心理学的教育学へ、認識論から、現象学は通り越して心理学的理論問題へとといった変動に会った。さらにこの講壇教育学に加えて、新教育運動の現実問題にも直面した。この一連の変動方向に即応してかれが諸領域を理解し、持ち帰れたかどうかは、十分でなく、限界もみせた。6ヶ月の滞在期間の延長で遅れの取り戻しをはかるが、着手の遅すぎた様相は拭いえない。このような事情が、かれの心理特質、外国語能力、交流範囲、情報量、経済状態などの個人の条件からきたのか、あるいはマールブルクで書物ととりくむ研究集中のためか、さらにはドイツ側がもつ客観事情によるのか、一義的には決定しにくい。しかし、上述したように、それにはかれ個人の条件とそこからくる心理などが大きく

作用した。いいかえれば、その困難が心理を抑え、その抑制された心理が困難をもちこみ、受容課題の達成を難しくした。このことは、単に山下の限界でなく、欧米受容を目的とする今日の在外研究者がなお見せる一面の実態でもある。30年代以降の大学のナチズム化のなかで、山下がマールブルクで係わり関心を示したハイデガーはフライブルク大学の学長として一時期ナチズムに氣勢をあげ、同様にイエンシュは心理学やマールブルク大学でその方向へ傾斜し、クリークもハイデルベルク大学の最高首脳、教育学界の「法王」になった。この事実は、本稿の範囲外とはいえ、山下の戦中・戦後期のスタンスをみるときを含めて忘れられるべきではないだろう。

こうした環境と時期のなかの山下は、外国動向を把握し、それを本国に紹介するいわばエイジェントとしてその義務をはたそうとしながらも、反面で自身の対応力量や帰国後の対処などでけっして不安がなく安定していたのではなかった。在外留学者としてのかれは、本国と外国との落差、自他両国でかれを取り巻いた歴史的な環境や条件、かれの個人的な人的交流の光と陰、思想的苦悩、心理的葛藤、これらにおいて一貫性を保持できなかつた。むしろしなかつたというのが正しい。かれのこの非一貫性は、その後の行程でも示されるし、マールブルクはその最初の一齣であった。これは時代の先端を走り続けようとしたかれの運命であり、しばしば教育学者がみせる躓きの石でもある。このことは、山下56歳の自伝的文章の表題も端的に示す。まさに、「ころび行く石 一意志は自己完成への努力である」。

Toshiaki Miyazaki:

Rezeptionsprobleme mit der deutschen Pädagogik bei Tokuji Yamashita —Seine nachgelassenen Notizen (1923–26) während seines Aufenthalts an Philipps – Universität Marburg —

- 1 : Vorbemerkungen —Problemstellung und Belege für diesen Beitrag—
- 2 : Der persönliche Hintergrund des Auslandstudium — Traumata und Außenseiters —
- 3 : Philipps – Universität Marburg und Gasthörer Yamashita
 - 1) Sprachstudium und Lehrveranstaltungen an der Universität —Probleme mit der Aufnahmefähigkeit—
 - 2) Rudolf Bultmann : Erklärung der ersten Briefe an die Korinther und dieselben der an die Galater — (Lehrveranstaltung)
 - 3) Martin Heidegger : Geschichte des Zeitbegriffes — Prolegomena zur Phänomenologie der Geschichte und Natur — (Lehrveranstaltung)
 - 4) NN : Allgemeine Erziehungslehre (Lehrveranstaltung)
 - 5) Japan – Gruppe und Tod Paul Natorps
 - 6) Neuer Betreuer Erich Jaensch und Marburger Schule der Eidetischen Psychologie
- 4 : Bilanz des Aufenthalts in Marburg

- 1) Wendepunkte in den wissenschaftlichen Trends an Universität Marburg und Unterschiede in den Paradigmen Deutschlands und Japans
 - 2) Yamashitas Wunsch nach Umzug : München und seine psychische Belastungen
 - 3) Aufenthaltsberichte und Verlängerung des Aufenthalts
- 5 : Schulbesichtigungen und Teilnahme an wissenschaftlichen Tagung
- 1) Nord Schule in Marburg
 - 2) Die Reformpädagogik unter Berücksichtigung der Eidetischen Psychologie Jaenschs
 - 3) Die Teilnahme an Internationle Psychologenkongress und die Forschungsreise in Nord - Deutschland
- 6 : Tokuji Yamashitas Alltagsleben in Marburg
- 1) Kontakte und Briefwechsel mit Personen aus und in Japan
 - 2) Abschied von Kuniyoshi Obara
 - 3) Eindrucks von der Umgebung : einseitiges Eintrag in seines Notizbuch
 - 4) Yamashita — Sein Untersuchungsschemata in der Psychopathologie, Erkenntnisse, Erziehung und psychologische Konflikte, und dazu Wissenschaft und Anthropologie in Dieseits und Jenseits —
 - 5) Die Topographie Marburgs, damals und heute — ein Beispiel : Gefängnis - Bild —
- 7 : Zusammenfassung

(Bulletin of Faculty of Education, 51, Kagoshima University, Japan, 2000)